

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

《理工農系》

●九州大学生物資源環境科学府

「生物産業界を担うプロフェッショナル育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

労働集約的な部分が多く、教員側のマンパワー不足があった。

系統学習と比べると学習者へのプレッシャーをかけないので、学習集団に対して均質な学習効果を予測することが困難であり、継続的な参与観察が必要であった。

学習者が持っている価値観や文化的背景がグループ学習の形態や運営にどのような効果をおよぼすかが不透明であり、質の高いチュートリアルが必要であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教員側のマンパワー不足。これは、プログラム運営に積極的に関わる教員が少ないことに他ならない。参与観察の重要性が明確化されても、教員数が不足して、最適な支援体制をとることに困難性が生じた。現時点では、積極的に関わる教職員の献身性で補われているが、このようなプログラムやカリキュラムを拡大するためには、マンパワー問題はついて回ることになる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

積極的に関わる教職員の献身性に頼るところが多かった。学内教育支援で、参与観察者養成に向けたOJTプログラムが始まろうとしている。また、積極的な院生をさらに元気にするためのポジティブメンタルヘルスケアについて、九州大学健康科学センターの連携を図った。

九州大学では、平成23年度に基幹教育院という全学的な組織を立ち上げ、学部から大学院まで一貫した基幹教育プログラムの開発を開始した。多岐にわたる専門教育との連携を行いながら行うこととしており、学内的理解とコンセンサスの構築に期待している。